


礼拝と断食をする中で、聖霊によって語られたアンテオケ教会の指導者たちは、バルナバとパウロを聖別し、福音宣教の働きへと送り出しました。彼らがまず向かったところ、それはバルナバの故郷キプロス島でしたが、彼らはそこのユダヤ人の諸会堂で、主のことばを語るのです。そして、島の西側の町パposに来た時に、ローマの地方総督セルギオ・パウロが信仰へと導かれます。聖霊に導かれたパウロを通して、彼が主の力ある教えを体験的に知ったからです。実にそれは聖霊による救いの出来事でした。

さて、今日の箇所は、その続きになるわけですが、パウロたちは、キプロス島に滞在することはせず、次の場所へと移ります。13-14 節「パウロの一行は、パposから船出して、パンフリヤのペルガに渡った。ここでヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰った。14 しかし彼らは、ペルガから進んでピシデヤのアンテオケに行き、安息日に会堂に入って席に着いた」。

 前の地図を見て下さい。パposから船出したパウロたちは、北上して、パンフリヤのペルガに着きます。そこでヨハネ（マルコ）が一行から離れたというわけですが、その理由は明らかにされていません。ただ、そのことが原因で、後にパウロとバルナバとの関係に亀裂が入ったことが 15 章に記されています。でも、この時には、それが旅を続けるのを妨げる理由とはならず、パウロとバルナバは、さらに北上して、ピシデヤのアンテオケまで行くのです。そして、安息日に会堂に入りました。

15 節「律法と預言者の朗読があつて後、会堂の管理者たちが、彼らのところに人をやってこう言させた。

『兄弟たち。あなたがたのうちどなたか、この人たちのために奨励のことばがあつたら、どうぞお話しください。』」。このように会堂の管理者たちに勧められたパウロは、16 節から 41 節に記されているメッセージを語ります。使徒の働きの中で、最初に記された彼のメッセージです。まずここで確認しておきたいこと、それは、ここでの聴衆が「イスラエルの人たち、ならびに神を恐れかしこむ方々」であつたということです。つまり、彼らはユダヤ人、またその教えに賛同する異邦人たちであつて、聖書に通じている人たちでした。

その彼らに対してパウロはこう言うのです。26 節「兄弟の方々、アブラハムの子孫の方々、ならびに皆さんの中で神を恐れかしこむ方々。この救いのことばは、私たちに送られているのです」。また、こうも言います。32 節「私たちは、神が父祖たちに対してなされた約束について、あなたがたに良い知らせをしているのです」。つまり、パウロは自分が語っていることは、アブラハムの子孫であるユダヤ人たちにとって、また神様を恐れかしこむ人々にとって、「救いのことば」「良い知らせ」であるといひます。そのように言われて、嫌な気になる人はいますか？むしろ、その内容を知りたくなるのではないのでしょうか？

では、パウロの語った内容のいったいどこが、どの部分が彼らにとって「救い」「良い知らせ」なのか？その鍵となる語は、「約束」です。つまり、神様は、祝福の約束をユダヤ人たちの「父祖たち」、また「ダビデ」にお与えになられました。そして、その約束の成就として、救い主イエスを送って下さつたというのです。

もう一度、32 節を見ます。「私たちは、神が父祖たちに対してなされた約束について、あなたがたに良い知らせをしているのです」。父祖たちとは、誰のことですか？それは、アブラハム、イサク、ヤコブ（後のイスラエル）といった族長たちのことです。パウロは、最初は「イスラエルの人たち」と呼んだ人たちのことを、次の時には「兄弟の方々、アブラハムの子孫の方々」（26 節）と呼んでいます。ですから、その約束は、最初アブラハムになされたということです。果たして神様は、どんな約束をアブラハムにされましたか？

創 17:7-8「…わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。8 わたしは、あなたが滞在している地、すなわちカナンの全土を、あなたとあなたの後のあなたの子孫に永遠の所有として与える。わたしは、彼らの神となる。」

本当は、これ以外も見れたら良いのですが、時間もないので、一部分だけを見ました。神様は、アブラハムに「彼の後の子孫との間に、代々にわたる永遠の契約を立てる」と言われたわけですが、それは実に、彼を祝福

するという神様の約束に基づいてなされたものでした。ですから、アブラハムの子孫たちは、この契約の成就として、イスラエルのカナン征服を見たのです。ここに、神様が父祖たちを選び、彼らをエジプトにおいて強くし、その地から導き出し、荒野で40年間、彼らを耐え忍ばれ、カナンの地で7つの民を滅ぼし、その地を相続財産として彼らに分配された、とパウロが説明しているのはそのためです。17-19節のところからです。

ところが、それでアブラハムとその子孫に約束された神様の祝福は完成したのかというと、そうではありません。イスラエルの民は、その指導者ヨシュアの死後、神様を離れ、おのおの自分たちの目になかったことをするのです。つまり、自己中心な生き方、罪の生き方へと戻ってしまいます。ですから、約束の地としての乳と蜜の流れるカナンの地には導き入れられましたが、彼らのうちには変わらず罪が存在したのです。そして、その神様への不信仰、不従順のゆえに、彼らはまわりに住む民から支配されるのです。20節以降に記されているように、民が神様に叫ぶ度に、神様はさばき人として士師たちを遣わし、彼らを救われるのですが、彼らがいなくなると、また自分勝手な歩みへと戻ってしまいました。

20-23節「その後、預言者サムエルの時代までは、さばき人たちをお遣わしになりました。21 それから彼らが王をほしがったので、神はベニヤミン族の人、キスの子サウロを四十年間お与えになりました。22 それから、彼を退けて、ダビデを立てて王とされましたが、このダビデについてあかして、こう言われました。『わたしはエッサイの子ダビデを見いだした。彼はわたしの心になかった者で、わたしのこころを余すところなく実行する。』23 神は、このダビデの子孫から、約束に従って、イスラエルに救い主イエスをお送りになりました」。

パウロのユダヤ名のサウロは、同じベニヤミン族で、イスラエルの初代の王サウロから付けられたものだと考えられますが、サウロ王は、神様に聴き従うよりも、民の前に自分の面子を守ることを大切にしたので、王位から退けられます。そして、彼の代わりに、神様は、エッサイの子のダビデを王として立てられ、彼を通してイスラエルの国は、しばらくの間、堅く立つのです。ところが、そのダビデも、数々の失敗を犯すことで衰退します。それでも、彼の息子ソロモンが王となることで、いよいよイスラエルは堅く立ったかのようにも思えましたが、でも、そのソロモンも、彼の多くの外国人妻たちによって持ち込まれた偶像によって、晩年、主から離れてしまうのです。そして、それを機に、イスラエルは、北と南とに分裂します。

ですから、約束の地としてのカナン征服の時と同様、ダビデ王もまた、イスラエルの国を堅く立てることはできず、その民に神の祝福としての全き安息を与えることはできませんでした。つまり、彼は、アブラハムの子孫ではありましたが、その「約束の子孫(メシヤ)」ではなかったのです。でも、そのダビデには、次のような約束が神様によって与えられていました。Ⅱサム7:12-13「あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる」。

パウロは、神様がダビデに約束した「彼の身から出る世継ぎの子、彼の王国を確立する者としてのメシヤこそ、救い主イエスだ」というのです。神様は、ご自分がアブラハム、またダビデに約束されたその約束に従って、イスラエルにこの救い主イエスを送って下さいました。ですから、ユダヤ人たちと神を敬う人たちは、みな聖書を通して、その約束された方を待っていたわけですが、パウロは、主イエスこそ、その方であると言うのです。そして、その約束の成就(証拠)として、33節でこう語っています。「神は、イエスをよみがえらせ、それによって、私たち子孫にその約束を果たされた」。

いかがでしょうか？あなたは、神様が「その約束を果たされた」ということと、それが神様をして、主イエスを遣わただけでなく、「よみがえらせることによって」ということとの関係がわかりますか？私たちは、ここでパウロがいうように、主が「エルサレムに住む人々とその指導者たち」によって罪に定められ、殺されたことを知っています。彼らは、預言者のことばを理解せず、自分たちの救いの君を木にかけて殺したわけですが、そのようにして、彼らは預言を成就させるのです。でも、そのことをすべてご存知の神様は、その聖者が朽ちたままにされることはないと言われ、主イエスを死よりよみがえらされたのです。

でも、もし主が死んだままであったなら、どうでしょうか？もし主が死よりよみがえっていなかったら、それでも、同じように救いのわざがエルサレム、ユダヤの諸地方やサマリヤで、またアンテオケやキプロスといっ

た異邦人の地でも起こっていたでしょうか？絶対にそんなことはありません。なぜなら、死よりよみがえられた主が弟子たちに現れることなしに、彼らが主を救い主として信じ、宣べ伝えることはなかったからです。でも、神様は、事実、主イエスをよみがえらされました。そして、主は、弟子たちに、聖霊を注ぎ、天よりも力を与えることで、彼らは主の証人となったのです。ですから、主イエスをして、彼がアブラハムやダビデ、また預言者たちによって約束されていたメシヤであるというのは、この「よみがえりによって」ということができます。パウロは、そのことをさらに聖書を引用しつつ説明しています。

33-37 節「神は、イエスをよみがえらせ、それによって、私たち子孫にその約束を果たされました。詩篇の第二篇に、『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ』と書いてあるとおりです。34 神がイエスを死者の中からよみがえらせて、もはや朽ちることのない方とされたことについては、『わたしはダビデに約束した聖なる確かな祝福を、あなたがたに与える』（イザ 55:3）というように言われていました。35 ですから、ほかの所でこう言っておられます。『あなたは、あなたの聖者を朽ち果てるままにはしておかれない。』（詩 16:10）36 ダビデは、その生きていた時代において神のみこころに仕えて後、死んで父祖たちの仲間に加えられ、ついに朽ち果てました。37 しかし、神がよみがえらせた方は、朽ちることがありませんでした」。

偉大なダビデは、その生きていた時代において神のみこころに仕えましたが、死んで、ついに朽ち果てました。つまり、彼自身は、王国を永遠に堅く立てるその人ではなかったのです。けれども、ダビデの子孫として生まれた主は、ユダヤの指導者たちによって殺されることで、罪人のための贖いの死を成し遂げられた後、死よりよみがえられたのです。そして、朽ちることのない神の救い主として、ご自分を信じるすべての者の罪を赦し、また永遠のいのちを与えることで、永遠にご自分の民を恵みによって治められる方とされました。主こそ、彼に望みを置く者に、聖なる確かな祝福としての御国を相続させて下さる方です。

38-39 節「ですから、兄弟たち。あなたがたに罪の赦しが宣べられているのはこの方によるということ、よく知っておいてください。39 モーセの律法によっては解放されることのできなかつたすべての点について、信じる者はみな、この方によって、解放されるのです」。この「解放されるのです」は、直訳では「義と認められる」です。ですから、神様に義と認められる、つまり、神様の祝福を受け継ぐに相応しい者とされるのは、律法を守り行うことのできない私たちが、自分でそれを行ったと主張することによってではなく、それを全うされた方、その従順をもって神の義の満足を満たされた約束の救い主イエスを信じることによるのです。

ということは、すべての人がこの方を信じるべきではないでしょうか。そうすると、私たちなら「信じて見ませんか？」と優しく促すと思うのですが、パウロは、ハバクク 1:5 から引用して否定的な表現を使ってこう語ります。40-41 節「ですから、預言者に言われているような事が、あなたがたの上に起こらないように気をつけなさい。41 『見よ。あざける者たち。驚け。そして滅びよ。わたしはおまえたちの時代に一つのことをする。それは、おまえたちに、どんなに説明しても、とうてい信じられないほどのことである。』」。

これは南ユダがバビロンに滅ぼされることを語っている箇所ですが、当時の人々は、預言者のことばを聞いても信じませんでした。それゆえに、事実、滅びが彼らを襲うのです。彼らはなぜ信じなかったのか？「とうてい信じられないほどのこと」ですから、それがもともと信じがたいことであったという印象をもたれることでしょう。でも、その前には「どんなに説明しても」とあります。つまり、イスラエルの指導者や民が、預言者のことばを信じなかったのは、彼らには神様に聞く耳がなかったからです。そういう意味で、彼らには「とうてい信じられないこと」だったのです。

いかがですか？今日、主イエスを信じているという方は、その信仰によって、主のみことばに日々耳を傾け、それに従っておられますか？聞いていない、または、ただ聞くだけで、行動が伴っていないということはないですか？もしみことばを聞くだけで、それが生き方として表れ出ていないとするなら、パウロのいう預言者のことばを信じずに、バビロンに滅ぼされたイスラエルと何ら変わりはないのではないのでしょうか？主を信じ、祈りとみことばをもって日々主に近づく人は、主のすばらしさを知るようになります。聖霊を通して、主がご自身を現して下さるからです。主こそ約束された方、私たちを罪と滅びから救うだけでなく、永遠のいのちを与えることで、約束された聖なる確かな祝福としての天の御国を受け継がせて下さる救い主です。